上演４ ２０２５年7月２６日（土）４校目 近畿ブロック（兵庫） 神戸常盤女子高等学校 「キャベツはどうした？」	第４９回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第７１回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会　担当委員 香川県立高松工芸高等学校 谷川　史美

高校生のトモエ、アスカ、ユーカの 3 人は、就職を目指し教室で履歴書を書いていた。自分の性格に合わない、とやりたい仕事を諦めようとしたり、親からの賛成が得られなかったりと、一筋縄では行かない様子だが、それぞれの壁を乗り越えようと奮起し、自分の進路や生き方について見つめ直していく。

この劇の大きな題材は、やはり進路だ。生徒講評委員の中にも 3 年生が多く参加しており、今の私たちの状況と重なる部分があり、深く共感することができたという声が飛び交った。親から一方的に意見を押し付けられるトモエの気持ちがよく分かる、というような意見もあった。また、トモエが進学に変えるとアスカに伝えたときに、アスカから裏切られたみたいだと言われたシーンでは、友達と一緒だと安心するが、違う道を選ぶことは寂しい気持ちもあるという意見も出ていた。

この作品で多く用いられていたのは、「アタリマエ」という言葉だ。トモエの家では、コロッケにキャベツを入れるのが普通であったり、金銭的に苦しい家庭は就職するしかないと思い込んだりしていた。また、ユーカは引っ込み思案だと自分を過小評価しており、本当にやりたいアパレルの仕事を諦めようとしていたり、アスカは集団の中にいるのが辛く、こんな自分に友達ができないとは「アタリマエ」だと思い込んでいた。しかし、この 3 人が出会い、化学反応を起こしていくことで、思い込みから脱却し、前を向いていくようになる。

最も印象に残った人物は、キャベツママこと小池明子だ。緑一色で揃えた服に教育ママを思わせる風貌。登場から強烈なインパクトを残した。さらに、発せられるセリフからも勇気をもらった。特に、「笑いなさい」という言葉は、3 人が悩みを吹っ切るきっかけとなり、メッセンジャーとしてなくてはならない人物だった。それとは対照的に、茶色のスーツに身を包んだトモエの母は、ひとり親家庭で仕事が忙しく、娘と向き合おうとしてこなかった。だが、一見すると自己中心的にも見られる母の言動の裏には、「自分のように辛い思いをしてほしくない」という、不器用な優しさの裏返しだったことが分かる。生徒側の視点だけでなく、親の視点から進路や親子関係について観ることができ、愛について考えさせられた。

その他にも「悪魔合体」というユーモラスな演出やタイトルでもある「キャベツはどうした？」というフレーズでお馴染みのキテレツ大百科の音楽が BGM として使用されていたりと、コミカルな要素がテンポを刻み、最後まで見ていて飽きず、終始楽しい気持ちのまま観劇することができた。

履歴書を書くという行為は、自分と向き合うということである。どうして就職したいのか、なぜその職種なのか、改めて問われると足元がぐらついてしまう。先生や親など様々な立場の人たちに左右されてしまいがちな私たちだが、世間のアタリマエではなく自分の「アタリマエ」でいいというメッセージを胸に、自分の意見をしっかりと持って流されないようにすることを大切にしたいと思った。